

「封城」(ロックダウン) 下の武漢の暮らし  
－ 方方女史の『武漢日記』(8)

田畑光永 (ジャーナリスト)

3月14日

快晴。桜はまだ満開だろうか。桜見物の開放日は、いつも雨が降ったり、風が吹いたりだとよく言われるが、それも2、3日ですっかり散ってしまう。満開を見て、すぐに落花の寂しさが来るから、その命のはかなさが人にあまたの感慨をもたらす。

病気のほうは引き続き好転が継続。感染の新確認数はますます少なくなって、このところ一桁が続いている。でも昨日、ある友人は数字にウソはないのだろうか、と心配していた。以前、隠蔽があったから、みな不信感でいっぱいだ。万一、数字の見栄えをよくするために、万一、自分の成績のために、また隠蔽が行われたらどうすればいいのか？この心配はよくわかる。まさに「一朝、蛇にかまれて、十年、縄を恐れる」だ。この心理がいろんなことを疑わせる。だから私はもっぱら友人の医師たちを問い詰める、「数字をごまかす可能性は？」。彼らは決然と答える、「ありえない、隠す必要がない！」。これは私の望む答えだ。

午後、同窓の狐(ホー)さんから連絡があった。彼の父親の胡国瑞先生は私の老師で、宋詞を教わった。先生の講義は素晴らしくて、よその学部の学生も大勢聞きに来るので、教室はいつも満員、とうとう老斎舎の大教室に移ったほどだった。

\*\*\*\*\*

狐さんの連絡は気持ちを奮い立たせてくれた。私はそれを2行にメモした。1、いい知らせ、易凡は危機を脱し意識を取り戻した。今日はビデオをとって、古い同級生と言葉を交わした。易凡の9歳の女の子はパパに何枚ものカードを描いた。胡渣も意識を回復した。北京の中日友好病院は奇跡をつくった。2、2日前に貴方の文章にあった死線をさまよっている2人の医師、易凡と胡衛峰(胡渣は彼の別名)はたまたま私の近所のジョギング仲間の同窓で、彼女は毎日、2人の容態を知らせてくれる。今日は「彼らの意識が戻った」と。

悶々とした日々の中で今日ほどのいいニュースはない。易凡は中心病院の胸部外科の副主任医師、胡衛峰は泌尿器外科の副主任。何日か前の新聞では彼らはなお危篤状態とのことだった。日記にもそう書いた。今、彼らはよみがえった。ほんとによかった。よかった。あと2人の医師が死線をさまよっている。優れた医師たちが彼らを呼び戻してくれると信じる。

中心病院は今回、医療人員の感染がひどかったので、ずっときびしい世論にさらされていた。しかし、これまでのところ病院の指導部がいかなる処分を受けたとも聞いていない。ネット上では病院の主だった幹部の責任を追及する声が絶えないが、病院の指導部は轟々たる世論の中で微動もせず、行方をくらました。まるで蒸発したごとく、そしてどの1本の糸も処分されたとは聞かない。武昌区の区長、青山区の副区长はみんなが議論を始めるやまもなく、やめさせられた。上級から処理の責任者がやってきたが、どんなルートで、基準はなんなのか、さっぱり分からなかった。分かったことは死傷者がどれほど多くなろうと、指導部が責任をとるとは限らないということだ。この話はここまでにする。これ以上言っても仕方がない。

今日はメディアの記者の話題でネット上に議論が飛び交った。内容きわめて豊富。私も何回か言葉をはさんだ。まず中心病院の艾芬医師が自分は呼子(小さな笛)をスタートさせたと言い、みんなは李文亮医師がその吹き手だったと認めた。つまり呼子は艾芬の手から李文亮の手に渡った。ならば李文亮の手からそれを受けとるのは誰であるべきだったか。李文亮が警察から訓戒処分を受けたことは警察が彼から呼子を没収したことはない。警察はかえって呼子の音をさらに大きくした。

新型コロナウイルス現る、のニュースは2019年12月31日に天下に知れ渡った。すくなくとも私はこの日にこのニュースを知った。次の日、警察が「8人のネット参加者」を訓戒したことは各新聞と中央テレビに出た。

しかし、これは呼子が没収されたことにはならない。では、呼子を引き継ぐのはだれか？つまり、次の吹き手はだれであるべきか？

武漢には2つの大きなメディア集団がある。長男は当然、湖北日報メディア集団で、次男が文句なしに長江日報ニュース集団である。2大集団に記者は何人いるのか？私は知らない。検索サイトの「百度」によれば湖北日報メディア集団旗下には「新聞7、雑誌8、ウェブサイト12、移動クライアント端末5、出版機構1、関連会社（独立、資本支配）56、全省17市・州に分社（記者室）があり、湖北最大のニュース発信および湖北PR情報の重要な窓口となっている」。この勢力を見れば、長江集団のほうも旗下の新聞、雑誌、ウェブサイト、会社も少なくなかろう。調べるのに疲れたが、こんな膨大な2つの集団だからニュース記者の数も少ないだろう。

記者の職責と使命はなにか？たくさんあるだろうが、私の理解では社会と民生を注視することは職責と使命のうちの最重要な一条であるはずだ。とすれば、問いたい。「新型ウイルスが見つかった」、これは爆発的ニュースであり、「警察が8人のデマを流したネット参加者を訓戒」、これもちいさなニュースではない。ともに社会と民生に大いにかかわるものだから、記者はニュースを流した後もさらに続報を伝えるべきだろう。ウイルスはどのように発見されたのか、感染は起こったのか？8人のネット参加者はどういう人間か、彼らはなぜデマを流したのか？などなど。

この種の事件に対して、プロの記者なら本来、高度の職業的敏感さをもって、呼子の李文亮に会ったはずだ。しかし、彼らはどうだったのか？「記者は現場ではなく、現場への路上にいる」などというありきたりは言わない。もし当時、ある記者がしっかり新型ウイルスを調査して、病院の医師たちがばたばた倒れていることを知り、また、8人の「デマ飛ばし」がじつは医師たちであること突き止め、高度の職業精神をもって会社と交渉して自分の声を発していたなら、結果はどうだっただろう？武漢はこんなにも長い間、惨烈な現場となっただろうか？あるいは湖北全省が閉じ込められたり、見捨てられたりしただろうか？さらに国中がさまざまな損失を被っただろうか？

勿論、私も信じたい。湖北にしる武漢にしる、たくさんの優れた記者はいて、追跡し、調査し、原稿も書いた。しかし、それは陽の目を見なかった、と。いやひょっとすると、彼らはこのテーマを提起したところで、却下されてしまったのかも。もしこういうことが本当にあったとすれば、それでもいくらか慰めにはなる。けれど、残念ながら今のところ、そういう話は聞こえてこない。嗚呼、艾芬はどうに呼子を手放した。李文亮の呼子はひと声鳴り響いた。その後、呼子を受け取る人はいなかった。呼子の音は2つのニュース業集団の放歌高吟の中に消えていった。

ウイルスは休むことなく蔓延し、拡散していった。医療従事者は1人また1人と倒れていった。そしてわれわれの新聞は1部また1部と色彩豊かに、笑顔、赤旗、美しい花、歓呼で埋め尽くされていた。私のような庶民でも新ウイルスにかかるとひどいと聞いて、1月18日から出かける時はマスクを着けているのに。

商業メディアはどうだったのか？19日には「万家宴」（大勢が食べ物を持ち寄って食べる行事）を伝え、21日には省の指導者が大規模親睦会に参加したことを報道した。毎日、庶民を賑やかな世相に浸るように導き、一言も気づかせる言葉はなかった、新型ウイルスが大きく口を開けて貴方の家の入口にすることを。

春節から仮設病院ができるまでのあの日々、千をもって数えられる人々の人生の悲惨に、そして自らの職業の履歴の中での最も重要な使命感と果たすべき職責を放棄したことに思い至る良心を持つ人がいたかどうか、私は知らない。そして市民を目覚めさせ、市民を誤まらせないように導くべき責任が誰よりも大きい2つのメディアのトップの人たち、あなた方も引責辞職すべきではないのか？

長江日報のW記者が言った、方方さんにできることは「妄議」（妄りに論じること）だけです、と。よくぞ言ってくれた。ほかのことはだめでも、この言葉はしっかり勉強した。よし、もうひとくさり、妄議しようではないか。（続）

## 「封城」(ロックダウン)下の武漢の暮らし

### － 方方女史の『武漢日記』(9)

田畑光永 (ジャーナリスト)

3月15日

引き続き好天。空が明るいと、心が弾む。数日前、同じ「文聯大院」(記者注：文芸関係の人が住む集合住宅の呼び名?)に住む母方の姪が肉まん、焼売といった粉の食材を届けてくれた。2日間食べてみて、北方人がなぜ粉食を好むかが分かった。便利だからだ。粉食の半製品の数は多い。ちょっと手をかければすぐ満腹。

米を炊き、おかずをつくるのに比べると、便利で手間がかからない(ついでに断っておく。武漢では外出禁止なのになぜ私が文聯に行って品物を受け取ったりできるのか、とうるさく質問してくる人にお答えするが、私は文聯の敷地内に住んでいる。だからあなた方が居住区の入り口で食料を受け取るのと同じこと。うるさいことを言わないで!)。幸い私は粉食が大好き。2日ほど、炊事の煩わしさと後片づけなし。以前、テイクアウトのお弁当を買って、食べたらポイと同じ。

友達のJWが彼女の弟の李さんが書いた文章を送ってきた。李さんには2人の友人がいて、ともに老年合唱団の団員。武漢では多くの退職老人が文化的な活動に参加している。とくにわれわれ世代は青少年時代に「文革」を経験した。当時、各学校には文芸宣伝隊があったから、歌ったり踊ったりできる人間が多い。現在、退職して暇になったので、その当時の芸術細胞が呼び起こされた。休日ともなれば、彼らは非常に活発で至る所へ出かけて行って公演、あるいは集会を順番にこなしていた。それが彼らの晩年を楽しいものにしていった。

今年も同じはずだった。ところが猛然と襲ってきた新型コロナウイルスに大勢が命中した。李さんは2人の友人への懐旧の思いを綴っている。書き出しはこうだ、「包傑と蘇華健、2人の身近な友だちがこの正月に突然、命を落としたなどは、どうしても思えない」。

武漢には感動的な物語がある。息子が病気になった。90歳のお婆さんは家族が感染するのを心配して、自分で看病しながら病院の外来で5日5晩、病院のベッドが空くのを待ち続けた。やっとベッドが空いた。彼の病状が悪化して集中治療室へ入ったのだ。徐美武という名のお婆さんは看護師から紙とペンを借りて手紙を書いた。「息子、頑張るのよ、粘り強く病魔をやっつけるんだ。治療では先生の言うことをよく聞いて。息が苦しくなっても我慢、我慢、きっと治るから。血圧が正常なら、鼻からの呼吸を先生にお願いしなさい。お金を渡すのを忘れたから、500元を先生に預けておく。身の回りのものを買ってもらいなさい」。

当時、この手紙を読んで泣かない人はいなかった。実の母親だったのだ。息子が60何歳になろうと、母親の中では彼はいつまでも息子だった。この息子こそ李さんの友達の包傑さんだった。残念なことに、この手紙を彼は読むことが出来なかった。翌日、この世を去ってしまったからだ。すべての親しい人たち、そして強い、誰からも尊敬される老母を残して。

李さんが言うには、「湖北省の黄埔軍官学校(昔、広東省の黄埔にあった国民党の軍官学校)同窓会所属の芸術団が春節の懇親会に向けてプログラムの準備を始めた時に、包傑も黄埔の後輩だったから、人の紹介で芸術団に入った。入ったとたんから、彼はすばらしかった。喉がよく、声も訓練されていて、歌には感情がこもっていた。2日もしないうちに皆が彼を歌のトップに推薦した。今年1月17日の正午、省黄埔同窓会主催の懇親会があり、彼は立派にトップの任務を果たした。その時、彼は私のそばにいた。」

しかし、包傑さんは1月18日にもう1つの懇親会に参加し、そこで感染した。「同時に3人が感染し、2人が犠牲になった」。

武漢市にはもう1つ「希文合唱団」という民間の合唱団がある。1938年の創立で、最初のメンバーは希利達女子中学と文華中学の先生と生徒たちだった。改革・開放以後、老人となった彼らは「希文合唱団」

を再組織した。メンバーは昔の2校の人間に限らず、社会全体に門戸を開いた。そして今年の1月にもかなりの活動ぶりであった。李さんの言では、彼と華健はともにテノールで、関係は密接だった。「1月9日、希文合唱団の一部の団員は范湖（市内の地名）で歌い、昼食をとった。これが華健と会った最後だった」。

そして言う。「彼は仲間内ではとても活潑だった。なのに、急に影も形も見えなくなった。電話をしても出ない。チャットも同じ。皆、おかしい、なにか変だと感じた」。その後、蘇華健とはずっと連絡がつかないまま、訃報が来た。彼が亡くなったのは3月6日、ネット上にはまだ希文合唱団の歌が残っている。そのうちの1つ、「牽手」はとても感動的だ。あるいはみんな行きずりだ、風雨の中の。だからこそ思いが動く・・・「だから手と手が引き合う。来世もともに歩く。だから伴侶を得ての道に、振り返る歳月はない・・・」一曲の歌で自分の人生を歌いつくした。

私は早いうちに隣人から、老年合唱団に感染者が多いと聞いた。新年と春節は彼らの公演の書き入れ時だ。そして彼らの年ごろは人づきあいがいい。李さんの文章には包傑、蘇華健お2人の写真が配されていた。すでに退職者とはいえ表情は精気にあふれている。もし警告があったなら、彼らは頻繁に公演に出かけ、一緒に食事をしただろうか？60歳前後なら現在の生活条件で豊かな文化活動を続けられれば、さらに20年くらいはなんの問題もなかったろう。

「人から人への感染はない。予防できる」。この言葉がどれほどの人を不帰の道に送り込んだことか。それを思うと、われわれ生きている人間は自分の生活を煩わせたくないからと、彼らを横死させた責任を明らかにすることに手を貸さないでいいだろうか？責任追及はしなければならないのだ？

ここ数日、病気の状況は引き続き好転している。武漢全体で毎日の新確定患者は一桁だ。もはや患者の数もそう多くないとなれば、出かけたり、仕事に戻ったりへの欲望はますます強くなる。このところ病気の話をする人はどんどん減って、逆に仕事復帰を語る人が増えている。ロックダウンは企業にとっても家庭にとっても、もはや耐え難いものとなっている。時間は長すぎるし、人間は抑圧されすぎ。政府はもっと機敏な政策を打ち出さねばだめだ。

よかったのは、今日、一部のすでに新規患者0となった地区へピンポイントで大型バスが乗客を乗せて走ったことだ。武漢の公共交通機関も明日から、一部企業の職場復帰する従業員の通勤のために動くことになった。これで今さら職場復帰取りやめ、封鎖解除なし、となったら、国の経済がやっていけるかどうかの問題どころではなく、多くの家庭が食べていけるかどうかの問題になる。

さて、私個人がこの2日間に会ったことを話したい。

私はブログを始めてから、この方式が気に入って、毎日の記録を全部、ブログにのせてきた。すると、数日前から突然、何千という人間の悪罵が襲ってきた。大した勢いだが、理屈抜きで下品。疑問から憤怒までの過程を味わったが、今はもうなんの感覚もなくなった。というのは、その連中の大多数が私の書いたものなど全く読んでいないことを、私は見ぬいたからである。彼らは誰かが私が書いたもののほんの切れ端を読んで、悪意あふれる解説するのを聞いて、すぐ私を罵倒するのである。彼らは罵倒のための罵倒を浴びせ、罵ることを遊戯にしている。

勿論、中にはもっともらしい理屈をこねるものもある。しかし、その理屈にしたところで、勝手に選んだデマの上に組み立てたものにすぎない。デマの上の理屈など理屈ともいえない。愚かしい上に口汚く、見たくもないので、何人かは受け取り拒否リストに入れて見ないことにした。でも、今日午後、こういう罵声や屁理屈を残しておくのも悪くないと思いついた。

残しておけば、これらの悪態つきが誰かがはっきり分かる。どんな顔かたちか、共通点はなにか、どんなグループに属しているか、共同で注目している人間は誰か、誰のブログを回し読みしているか、誰と行動しているか、ウイルスの発生源を発見するように感染源がどこかが分かる。いつ同時に叫び声を上げるかを決めて、背後で煽ったり、そそのかしたり、仲間を組織したりしているのは誰か、以前には誰に悪罵を浴びせ

たか、などなど。

こういう一群を観察していると、得るところが多い。7, 8年前に遡って、当時の学生たちをあおって「真面目なエネルギー」を動員しようとしたピラに出くわしたり、さらに彼らの指導者として推薦された一山の人名を発見したりする可能性がある。昔、ある部門の責任者だった1人にこう聞いたことがある。「貴方たちはなぜこんな連中に学生を指導させるの？ やつらの中の何人かはやくざじゃないの？」惜しむらくは、相手は言うことをきかなかった。

現在は、あの頃けしかけられてネット上で「真面目なエネルギー」を発揮した連中が、指導を受けて今の彼らになっている。群れの中で走っている中の大勢はけっして悪くない。しかし、ネットの世界に入り込むと、それぞれの暗い面、悪い面を無制限に拡大することになる。

インターネットには記憶がある。いいことだ。その上、この記憶はすこぶる長持ちする。だから、私のブログへのコメントを一つの定点観測点、この時代の生きた標本とすることができる。どの時代の記憶にも、美しい感動的な記憶もあれば、痛みと悲しみの記憶もある。しかし、残った痕跡がもっとも鮮明なのは間違いなく恥辱である。この時代に恥辱を刻むものはとても重要である。湧き上がるような悪罵と雑言はこの時代のもっとも強烈な恥辱を記録するものである。

未来の人々はこれらを読んで、2020年にはウイルスが起こした疫病が武漢に蔓延したことと、もう一種の疫病が言葉の形で私のブログのコメントに蔓延したことを知るだろう。武漢における疫病の蔓延はこの一千万都市に前代未聞のロックダウンをもたらし、私のブログのコメントの疫病はこの時代のかくも鮮明な恥辱を示している。

感染区に閉じ込められた受難者である私は生活上の些事と感想を日記に書いてきた。この日記は半分も残らないだろう。しかし、百人千人がよってたかって投げつけた悪罵は私の日記より永く残るかもしれない。  
(続)

## 「封城」(ロックダウン) 下の武漢の暮らし

### — 方方女史の『武漢日記』(10)

田畑光永 (ジャーナリスト)

3月16日

空がまた暗くなった。しかし、花咲く春、の花は「多彩多姿」だ。色彩が陰鬱を細かく砕いてくれる。だから抑えつけられる感覚はない。離れた江夏(市内の旧武昌区が江夏区となった場所、筆者はそこにも家を持っているようだ)のお隣さん、唐小禾(トウショウカ)先生が我が家の門前の写真を送ってくださった。迎春花が咲いていて、黄色が輝いている。海棠(カイドウ、バラ科の1種)は盛りを過ぎて、散り始めている。その落ちた花弁が迎春花の地面すれすれの緑の葉と組み合わせあって、とても情緒がある。唐先生の家の紅玉蘭は毎年、素晴らしい。密生して輝く。傍の道を通ると世間が沈んでいる時でも、その赤い花は喜びの空気をあたりにしみこませている。

今日も病気の状況はここ数日と大きな変化はない。低位に張り付いたといった感覚である。新しく確認された患者は相変わらず数人で、生死の線上にいる重症者は3000人強である。仮設病棟はすべて休院。ただ、今日、どこからか分からないが、仮設病棟を休院にしたのは「政治休院」で、病気の状況がよくなったわけではない、という話が伝わってきた。

ただ私の印象では、数日前にも言ったように病院のベッドは足りているし、回復していない患者はすべて病院に入った。治った病人はホテルで14日間の隔離に移っている。だからその噂は根も葉もないものなのかどうか、友人の医師にどう思うか聞いてみた。答えはきっぱりしたものだった。「間違いなくデマだ！ そんな必要もないし、そんなことできない。徹底的に蔓延を抑えるのが政治の現在だ。0になるまで入院患

者を積極的に治療する。政治が予定より早く病院を閉めるなどと言うはずはない。伝染病は隠しきれない！ここでの重大な是非は政府を信頼することだ！いくら向こう見ずでも広い空を隠すことはできない！急性劇症伝染病は徹底的に抑えなければ必ず蔓延する。誰も隠せない！。「！」は全部、友人本人がつけたものだ。私はこの話の方を信ずる。

ウイルスはとうに政治至上主義のチャブダイをひっくり返してしまった。今さらだれが隠蔽など考えるだろうか？1か月余り前の武漢の恐ろしい情景を再現しようと思う人間はいないだろう。

多くの人間がウイチャットで巖歌苓（ゲンカレイ、女性作家、1958年上海生まれの米国籍中国人）の文章を転送し合っている。私にも友人が送ってくれた。タイトルは『借唐婉三字：瞞、瞞、瞞』（末尾に注）。遠くベルリンにいる巖歌苓も武漢を注視し、心配している。だいぶ前になるが、湖北省作家協会が主催して、世界華人女性作家会議を開いたことがあった。巖歌苓も武漢に来た。その時、私たちは彼女に武漢大学で講演してくれるように頼んだ。当日、私は行かなかったが、会場は超満員だったようだ。

巖歌苓は直観が鋭い。彼女は今回の感染症が最初の段階から災難に転化してゆく過程を重要な一つの文字：「瞞」と捉えた。後になって抑え込んだとしても、最初に蔓延が進んだ肝心の段階には、「瞞」の字が見えないところはない。それにしても、なぜ「瞞」だったのか？故意か、手落ちか？あるいはほかの原因か？とりあえずこれは保留しておこう。

そこで、親愛なる歌苓さん。貴方の文章を読み終わりました。大変感動し、感慨を覚えました。しかしまだ友人たちに回すことはできません。削除されてしまうでしょうから。ご存知と思いますが「瞞」の兄弟分は「刪」（削る）です。われわれはこの「瞞」の兄貴分にさんざん痛めつけられてきました。ネット上でいつ、どんな原因で、条令違反を犯したのか、自分では全く知らなくても、誰もそのことを貴方に言わなくても、そして受け入れないと言っても、受け入れざるを得ないのです。

今、文壇が驚いているニュースはLlosaの本が全部、書店の棚から降ろされたことだ。こんなことがありうるのか？まったく信じられない。Llosaを読んだのは青年時代だった。あの頃、作家はみな彼を読んだと思う。多くの人が彼の文章の運び方、そして型にとらわれない構成を喜んだ。しかし、実のところ、私が読んだ彼の本は3冊を越えてはいないはずだ。それも最も人気の高かったものを。しかし、このニュースを聞いて、ほかの作家たちと同様、私もまず驚き、次に怒り、最後は悶々とするしかなくなり、何と云っていいかわからず、その実、ぶつぶつ言う以外、モノを言う場所とてない。Llosaが何を言ったとしても、彼は政治家ではない。作家ではないか。

数日前にこういう文章を読んだ。そこに作家を形容するこんな一句があった。「書くことのもっとも基本的で、最高の使命はデマに打ち勝ち、真実の歴史を明らかにし、人類の尊厳を回復することだ」。誰が書いたのかは知らない。Llosaはもう80歳を過ぎているだろう。われわれはなにをすればいいのだろう。「瞞、瞞、瞞」の三字は唐婉と陸游（末尾の注）の愛情物語に登場することは多くの中国人が知っている。ここでは陸游の詩から字を三つ借りてこよう、「錯、錯、錯」（誤りの意）。

今日、知ったのだが、よそから湖北に助けに来てくれた医療人員がすでにグループごとに帰り始めたようだ。ところが「開城」のニュースはさっぱり聞こえない。耳をそばだてる話がネット上を乱舞しているが、デマもかなり多い。ウイルスも獰猛だが、ウイルスよりもっと手ごわいのが彼の前に立ちはだかっている。それは、多くの人が生きていけなくなった、ということだ。

今日、北京の1人の記者が私に「湖北人の呼びかけ」という文書を送ってきた。それで数日前に聞いたその電話録音を思い出した。あらためて文章を見ると、きわめて客観的で事理は明晰だ。そこで提起しているのは政府が考えなければならない問題である。その主要部分をここに記録しておく。

私は自分の言ったことの法律的責任を負う。あなた方はウイルスを防除する。われわれ一般庶民は大いにそれを支持し、大いに協力する。しかし、こうも長期間、50余日も閉じ込められると、不健康とされるべ

きも健康ということになってしまう。あなた方は個別の事情に応じて政策を適用すべきだ。あなた方政府はなぜなにも行動しないのか？

こうして毎日毎日、家の中でじっと待っている。あなた方はなかなかいつということと言わないが、こっちにも目安が要る。3月末、4月末、それも時間だ。でも、現在はもはや時間は問題ではない。何の希望もなしに、こうして家でじっと待っている。一日一日の生活費、みな一家の主だ。金をかせいで朝から晩までの食う、飲む、油、なんでも金が要る。当然、話はどうどう巡りだが、食べたものは腹におさまってしまう。そして、毎日払わなければならない出費がある。

われわれが毎朝、目を開いて最初に見るものは大新聞のトップ記事、感染者がどれだけ増えたか、どれだけ減ったか、である。見ていると、武漢一帯はたしかに病状は重要であるが、湖北省のすべての都市が武漢と一緒に時間を過ごしているわけではない。それは事実だ。私は1月26日に帰ってきた。それからの日数を数えてほしい。毎日毎日、家でじっとしている。食べては寝て、寝ては食べる。大事なことはこうした日々がいつになったら終るのが分からないということだ。始めは3月1日、それから3月10日、3月11日になったら3月15日と言う具合。鍾南山（前出、コロナ対策の医師の中心人物）は6月末に延ばした。

ずっとこれが続いて、次に何かが始まるのはいったいつなの？

隔離をするのもいい。感染した人とともかく隔離するには、支持し、協力する。しかし、隔離するのは病毒であって湖北人ではないはずだ。それにわれわれはすでに家に隔離されているのに、外へ出ればまた隔離される。理由は何にせよ外に出れば隔離なら、外へ出て隔離されて14日後、ご当地政府の検査を受けて正常だったとしたら、出勤して、収入を得て、正常に戻れるということか。家の中にいつまでも隔離されて、5月末になり、6月末になり、外へ出てまた半月の隔離、などとなったら、この1年にいったい何ができるのか？これほど浪費される人生は誰の人生なのだ？

お偉いみなさんよ、われわれの身になって、われわれの訴えを聞いてほしい。これは私1人の声ではなくて、大勢の人民大衆の声なのだ。騒ぎを起こそうというのではない。生きねばならない、食べねばならない、水も飲まなければならないのだ。考えてほしい、われわれ庶民の立場から問題を考えてほしい。負担を感じない家があるとお考えか？下の階では朝から晩までスピーカーが喚いている。「外へ出るな、外へ出るな、外へ出るな」。いつまで外へ出られないの？外出禁止はどの程度まで？外出禁止の条件は？外出禁止の理由は何？朝から晩までヒゲをいじっている人間の鶴の一声。外出禁止とは家を出ないということだ。ウイルスを隔離するので、湖北人を隔離するのではないのだ。それで分かるはずだ。分かれば、通達されてきた文献の精神が貫徹できる。

\*\*\*\*\*

今日は「封城」54日目、一組のランプ・カードなら切り終わった。(続)

**訳者注：**陸游と唐婉の悲恋物語。12世紀、相愛の2人は結婚するが、陸游の母の反対で離別させられ、陸游は漂泊の旅に出る。10年後、2人は浙江省紹興の沈園で偶然、再会するが、すでに唐婉は別人に嫁していたため、再び涙ながらに分かれる。

## 「封城」(ロックダウン) 下の武漢の暮らし

### — 方方女史の『武漢日記』(11)

田畑光永 (ジャーナリスト)

3月17日

封城55日目。

晴天。ごみを捨ててに出る。木の枝越しに坂の下の満開の桃の花が見えた。いささか「灌木、春色の断ず

るを遮らず 一枝の紅桃、墻より出る」といった趣を感じた。「文聯大院」（筆者の住む居住区）は人が見えないことを除けば、そのほかのすべてはいつもと変わらない。

今日の発表では確認された新しい患者は1人だった。0はもう目の前だ。多くの重症患者もつぎつぎと救出されている。もっとも彼らは完全回復までにはまだ長い時間がかかるけれども。彼らが頑張り通して、苦しくてもまず生き残って、そこから治癒への道をゆっくり上がってほしい。今のところ役所が発表した湖北省の新型コロナ肺炎による死者はすでに3000人余りに上る。間違いなく人の意気を沮喪させる数字だ。病勢を終息させ、遺族を慰めることは非常に重要だ。病勢を通して見て、国が湖北救済に力を入れ始めてから行ったさまざまな措置はかなり有力、かなり有効であった。その一步を踏み出すのが大変だった。

たくさんのもっといいニュースも他省に伝えられている。友人たちのいるところ、どこでも皆、それを見ている。その中のもっとも重要な知らせは、武漢を除いて全省の各地、各市は生産再開が始まり、大勢の従業員、労働者は武漢へ帰り始めている、というものだ。われわれが最も聞きたかった、最高のニュースである。武漢がまたあの雑踏を取り戻し、生气澆刺たる情景が再現されるのを本当に見たい。

武漢には実のところ、企業などよりもっとも待ちきれない人たちがいる。それも少数ではない。多数いる。それは子女がよその土地にいる「空巢」老人と独居老人だ。こうした老人たちの普段の生活は介護士か時間制のお手伝いに完全に頼っている。春節には介護士も時間制のお手伝いもほとんどは家で年越しをして、年明けに出勤してくる。ところが今年は封城のおかげで大多数が決めた通りに老人の家に来ることが出来ず、老人たちの生活が大変なことになった。何日前か、知り合いの曾さんと彼のお母さんについて話したことがあった。

武漢にはかなり有名な「老通城」という店がある。その名前は漢口（武漢市は長江とそれに左岸から合流する漢水によって大きく3つに分かれるが、漢口は長江左岸の下流の部分）では知らない人はまずいない。老通城の「豆皮」（トウピー、米と緑豆の粉と卵で作った薄い餅で米飯、肉、筍などを挟んだ食品）は武漢人に最も人気のあるおやつだ。創業者の名前は曾広誠という。大分、昔になるが、湖北省作家協会が文学プロジェクトの1つとして、地元の人から公募して地元のことを書いてもらったことがあり、曾さんはそれに応募してきた。

彼が書こうとしたのは『漢口老通城曾家』。彼は創業者、曾広誠の一番上の孫であった。創業者は彼に多くの痛みを背負わせたが、一方では大きなエネルギーを与えた。曾さんはそういう家族の在りし日を書こうと決めたのだ。われわれは曾さんを選んだ。そして曾さんは粒粒辛苦の末、三部曲の形式で物語を完成させた。

数日前、その曾さんが言うには、97歳になる母親が湖北大学の教員・従業員住宅に住んでいる。曾さんたち家族はみんなよそで仕事をしており、弟が1人だけ武漢にいる。しかし、住んでいるところが封鎖され、母親のところへ行けなくなってしまった。母親は1人住まいを喜ぶたちで、直前までは時間決めのお手伝い1人を頼んでいただけだった。母親は精神も身体も悪いところはなかったが、お手伝いも離れた場所で隔離、母親のところに行けないとなった。

曾さんたち家族は慌てた。独居の老母はほとんど炊事はできない。生活の必需品を買うこともできない。集中配送にも参加できない。野菜など玄関前に置いていただけだから、母親にはなんにもできない。毎日の食事をどうしたらいいのか。薬もすぐに飲み終わってしまう。おまけにスマホもウイチャットのだめ。必要があっても、どうして外と連絡するか。曾さんの言うには、「電話が壊れそうになるほど、焦りまくった」そうだ。

幸いなことに湖北大学の居住区ではサービスを状況に合わせてくれた。野菜を届けても、それを調理することができない。野菜を届けただけでは母の問題は解決しない。母は温めれば簡単に食べられる饅頭と漬物などを欲しがる。そこで、また曾さんは居住区に助けを求め、居民委員会が調理済みのものを届けてくれ



るように手配した。そして大学病院の当直の医師にも連絡を取った。大学側の事務員も学生も関心を持ってきて、品物を届けた時には、曾さんのお母さんが中に入って、何か頼む用事がないか待ってくれるようになった。そして蜂蜜の瓶の蓋や醤油の瓶の蓋が開かないと聞けば、同意を得て中に入り、蓋を開けた。

曾さん曰く、毎日、母に電話するが、話し声は楽しそうだ。そして勉強好きの情熱を発揮して、私に屈原や李斯（いずれも有名な歴史上の人物）の話をしてくれる。母は毎日、創作を1000字ずつ書いていると言い、私に読んで聞かせる・・・。

お母さんは「彼らは毎日3度、食べ物を届けてくれる。一生のうちこれほど大事にされたことはない。大学は本当に行き届いている」と言っているそうだ。

97歳！1人で生活し、創作の文字を書きながら、これほど長くなった封城の日々をゆったりと暮らす。なんと頑強な太太であることか！尊敬、感服するのみ。しかし、長い目で見れば、老人にこんな形で生活させることは、やはり明らかに不適当だ。武漢で介護士や時間決めお手伝いに頼って生活している老人は千や万では止まらないだろう。その人たちは切羽詰まった気持ちで世話をしてくれる介護士やお手伝いが戻ってくることを待っている。さらに言えば、私自身だってそうだ。

昨日、あるネット友達がブログにこんなコメント残した。「私のところは黄冈蕪春県、封鎖解除6日目。この2日間、仕事の決まった出稼ぎの人たちが貸し切りのバスで続々働き場所の都市へ帰って行った。湖北のいくつかの市は大体こんな感じ。それからその他の県や市でも自家用車で省を出て働きに行くのを認めている。全体として湖北は長期間、封じ込められていたが、今、状況はゆっくりと好転しつつある」。

本当にいい知らせ！うちのお手伝いさんも蕪春の人、今日、早速連絡してみよう。ただ、聞くところでは道がまだ開通していないというから、武漢へ戻るにはまだ何日かかかるだろう。

今日はもう1件、記録しておくべき重要なことがあった。湖北に来ていた応援の医療隊が今日、続々撤退し始めたというのだ。彼らは湖北がいちばん危ない時に危険を冒して助けに来てくれた。湖北人は全員が彼らに恩義を感じている。4万人を超える医療人員の誰1人も感染しなかった。よかった！われわれ恩恵を被ったものも一息つける。別れとなると、感慨は深くなる。今日、友人の間で見たビデオでは、医療隊が帰る際、家から出られない武漢人はそれぞれのベランダで、皆さん、有難う！ご苦労様！さようなら！と叫んだ。熱い涙があふれ出た。武漢の道々で人々はみな最高の礼儀で白衣の天使たちを見送った。彼らがわれわれの都市とわれわれを救ってくれたのだ。

聞くところでは、湖北の襄陽市では襄陽を助けてくれた医療隊員全員の名前を記録して、今後、区域内のすべてのA級観光地と25の星級ホテルではその人たちを終身無料とすると決めたとか。本当かどうか分からない。でも、私は「そうあって欲しい！」と思う。全湖北のすべての観光地をその4万人余りの人たちに開放すべきだと思う。

勿論、感動の中には笑い話もある。四川省の医療隊が湖北省に出発する時、1人の女性隊員の夫が車の下で叫んだそうだ。「趙英明！無事に帰って来いよ、家事は1年ひきうけた！」。今、趙英明は無事に帰宅した。

そして早速、彼女は動画を友人たちに配信してこう言った、「友達の皆さん、この夫が毎日、家事をちやんとするように監視してください」。見た人たちは笑い転げた。彼女がその後毎日、家庭の様子を放送しているかどうかは分からない。

この数日のいちばんにぎやかな話題は外国から帰ってくる人たちのことである。こんな言い方がある。中国は前半戦を戦った。中国以外の国は後半戦を戦う。留学生は両方とも戦う。つまり、新型ウイルス肺炎がひどかった春節の時、海外にいた留学生は続々と帰って来た。現在、中国はすでに蔓延を抑え込んで、湖北省も安全となった。そして今は諸外国が緊張しているのだが、留学生たちは今度はそこへ帰っていく、と。

しかし、この言い方は正確でない。早くから外国にいた留学生たちは病気の蔓延がひどかった頃は、各

地を奔走して国内に援助物資を送っていた。大いに力を尽くしていた。今はそれぞれ元の場所へ帰っているが、実際はそうだったことをはっきりさせておかなければならない。面白いのは大勢が私に今度のことをどう思うかと聞いてきたことだ。

私には自分の子供のように心と心がつながっている気がする。もし私に子供がいて、海外にいたら、私もきっと呼び戻した。皆が英雄になる必要はない。それは許される。家に帰るということは、心の中で自分の国は頼りになると思っているからだ。それがその人の信頼感と愛国心だろう。抗日戦争当時、「逃難」という言葉があった。日本人が来たとなると、大勢の庶民は南へ逃げた。なぜその土地にとどまって「鬼子」（日本兵）と戦わないのか、などと責める人間は1人もいなかった。「逃難」は人間の本能だ。とどまって日本と戦うのは英雄だ。「逃難」して逃げたものはせいぜい英雄ではなかったというだけのことだ。まして自分でも英雄ではないと認めているのだから、なにも責められるいわれはない。

海外にはまだ十数万人がいて帰国したがっているとされる。中国はこんなに大きいから、各省はそれぞれ自分のところの子弟を帰宅させればいい。それだけのことだ。病気にかかったものは入院させ、そうでないものは帰宅させて隔離すればいい。ただ、病から逃れた過程や帰国後において、規則は守れなければならない。自分を守るために他人の利益を傷つけないというのは前提であり、常識だ。

ついさっき1人の高校生がロックダウン解除のスケジュール表を届けてきた。: 22日、別の場所に留まっていた人間はまっすぐに湖北省あるいは武漢市に帰ることができる。湖北省あるいは武漢に留まっていた人間は湖北省あるいは武漢を離れて目的地へ直行できる。24日、公共交通機関、地下鉄の消毒、運行再開の予行演習などの準備。26日、集合住宅敷地内封鎖解除、住民は居住区内で活動できる。29日、少区内封鎖解除。住民は保健番号、就業証明、自家用車、自転車、徒歩で仕事へ復帰。31日、企業での生産、市場取引を手順を追って正常化。4月2日、重点商業地区の正常化。4月3日、公共交通機関、地下鉄の運行回復、実名制で乗車。4月4日、空港、高速道路、動車（不明）、国道の正常化。学生さんはこのメモを渡して、こう付け加えた。「回って来たもので、真偽は不明です」。本当だろうとウソだろうと、大いに元気づけられる。生活が次々に正常に戻ることははっきりした。

\*\*\*\*\* (続)

記者注：今回の後半の部分、つまり外国へ出ている子女が新型コロナ肺炎の蔓延時をどこでどう過ごしたかということ論じている部分は、正直なところなかがどう問題なのか、すっきりと分からない。あるいは中国人なら、こう書くだけでお互い理解できるのかもしれない。いずれにしろ、極力、原文の論理を外さないように訳したつもりなので、あとは読者の想像力で補っていただきたい。

## 「封城」(ロックダウン) 下の武漢の暮らし

### － 方方女史の『武漢日記』(12)

田畑光永 (ジャーナリスト)

3月19日

封城 57日目。

今日とうとう待ち焦がれていたいいニュースを聞いた。武漢で感染確認がゼロ、疑似患者もゼロ！そして友人の医師が興奮して言う、「ついにゼロだ。3つのゼロ、蔓延は抑え込んだ。外からの侵入も抑えた。今の主題は治療だ」。

同時に、今日は湖北省のお役所が他省へ働きに行く労働者を送り出し、全国の人民に湖北人をよろしく、と呼びかけた。そう、湖北人をよろしく。感染した人が病人なのであって、湖北人全員が病人というわけではない。数千万の湖北人は感染を広げないために2か月近く、家の中に閉じ込められた。受けた圧力と克服した困難はよその人には分かってもらえないだろう。湖北人はこの災難の中で克己、隠忍、全中国への蔓延

を抑えるために大きな貢献をした。だから、ここで叫びたい。各地の友人の皆さん、湖北人をよろしく。皆さんの安全に貢献した人間たちをよろしく。

次の段階はよそから人が武漢市に来ることになる。私個人について言えば、お手伝いさんもパートの雇人も早く来てほしい。もう2か月、わが家は徹底した清掃が必要だ。老犬は汚くなり、臭くなった。皮膚病が再発したのだ。私の手も荒れて、裂け目ができてしまい、彼を洗ってやるのが出来ない。動物病院はいつから始まるのかしら？毎朝、彼を庭で放す時、「もうちょっと待っておくれ、あと何日かで気持ちよくしてやるからね」と言い聞かせている。百業、興るのを、我らはじっと待つ。

いつものように朝起きて、朝食をとりながらスマホを見る。意外なことに、昨日は「高校生」が公開書簡を送ってきたが、今日は彼の家のあっちこっちの「親戚」が出てきて（彼の「親戚」はまことに多い！）（注1）、彼に公開書簡を書いている。勿論、ほかにも大学生、中学生、小学生も手紙を書いている。そのうちの何篇かにはこらえきれずに笑ってしまった。自分でもこれほど笑ったのは久しぶりだった。今日はゼロの日だったから、大笑いにはピッタリだ。易中天学長の曰く、今日は全民、手紙を書く日だとか、これにも噴き出してしまった。

李文亮についての調査も、今日、結果が出た（注2）。この結果をみんなが受け入れるかどうか、満足するかどうか、それは分からない。私はもはや何も言いたくない。李文亮は死んだ。彼のブログは人々の嘆きの壁となった。無数の人々が彼を永遠に忘れないだろう。誰もが知っている。彼は英雄ではない、生活も普通の人と変わらない、彼のしたことも人の普通の感情の範囲の中のことだ。しかし、われわれは彼を忘れない。そしてできる限り彼の家族を助けよう。それでいい。

あの調査結果はほんとにどうでもいい。われわれの記念は、言うなればわれわれ自らを記念する。われわれがこのような日々を過ごしたことを記念する。その日々の中で一番重要な人間、それが李文亮だ。

けれど若い人は私より激しい。午後、若者が1人、私にコメントしてきた。「時代の一粒の灰、それが中南派出所に落ちた。それだけのこと」。前記の高校生への返信を読んだ時と同じように、こらえきれずにまた笑いだしてしまった。しかし、やはりこれだけは言っておきたい。本当のことというのは、複雑なのだ。それはわれわれ凡夫俗子には明らかにはできない。ある事柄には時間を与えよう、時間が役に立つかどうかは不明だが。

このところの武漢は相変わらず外出禁止ではあるが、基本的には安全都市となったことは皆、知っている。勿論、人々はまだ警戒しなければならないと言うが、心理的にはすでに解放されている。都市の現実、庶民の心中、ともに1か月前とは天地の差がある。われわれの生活は間もなく以前のリズムを取り戻すだろう。封城は急ブレーキのようなものだったが、開城はおそらくゆっくり進む徐行型だ。

しかつめらしく某々と名乗る指導者が出てきて、「明日より開城」と宣言してこの記録が止まる、などということが必要だとは思わない。あるいはそんな区切りの日は来ないかもしれない。なぜなら城門にはすでに一本の割れ目が入り、それがゆっくり全開へと向かっているようなものだからだ。

そこで私は数日前に二湘さん（注3）に言った。「54篇を書き終えたら、おしまいにする。丁度、ランプのカード一組分を切り終えたところで」。ところがなんと昨日が第54篇だった。だからと言って、今日中

にあの「10万+」を名乗る「高校生」の公開書簡に返信しようとは思わないし、そんなことは不可能だ。そこで、結びを書く機会を失ってしまった。今、私はいつこの記録を終わりにしようか、思い迷っている。

ついでに言っておきたいことがある。私の文章はUIチャット上でずっと二湘さんのアカウントに助けられて発信している。理由は簡単で、私のブログが封鎖されたためなのだが、その日に丁度、李文亮が亡くなった。私は唯一のアカウントを失い、UIチャットもできないので、発信するすべがなくなってしまった。そこで普段読んでいる二湘さんのブログを通じて、彼女に私の文章を発信してほしいと、助けを求めた。

彼女は同業者としてすぐに承諾してくれた。

当時、私は彼女が小説を書くという以外、なにも知らなかった。会ったこともなかった（勿論、今もまだ会っていない）。その後、彼女を紹介する文章を読んで彼女の基本的な事柄を知った。簡単に言えば彼女と私の関係は、ネットのアカウントを使いこなせる作家が使えない老作家を助けて文章を発信してくれたというだけのことである。それを陰謀論の愛好家が重大な陰謀のように仕立てたのである。

私は二湘さんには大変に感謝している。彼女が武漢に来遊されるのを心から歓迎する。武漢では魚をご馳走したい。武漢の魚は本当においしいし、武漢には魚さばきの名人がたくさんいる。

もうすこし余談を続ける。はるか昔、大学生のころ、いくつもの文学サークルがあって、文学上の話題について議論を交わしていた。しかし、討論を重ねたところで、到底結論は出ない。やがて私は面倒くさくなって、そういうテーマをこっそり「老三篇」（注4）と名付けた。その3つのテーマとは、称賛か暴露か、喜劇か悲劇か、光明か暗黒か、であった。そして討論を繰り返したのは要するに、文学は称賛の文章を書くことしかできないのか、喜劇だけしか書けないのか、社会の明るい面しか書けないのか、であった。そして社会問題を暴露し、人間の悲劇や社会の暗い面を描くのは反動的作家である、ということであった。

そして1978年から1979年にかけて（注5）、結論に至らないまま、どういうわけか、みんな討論をやめてしまった。その後、またクラスで一度、大討論が起こった。「文学は階級闘争の道具であるか否か」がテーマだったが、やはりこれという結論は出なかった。時間がゆっくりと過ぎて、私は卒業し、仕事をし、職業作家になった。そしてある日、発見した。同窓の仲間たちといわず、文学界全体として、これらの問題にはすでに共通認識が出来ていたのだ。それは、何を書いてもいい、重要なのはうまく書けているかどうかだ、ということであった。そこで私は講演などでは、たくさん問題はあるけれども討論など必要ない。時間が答えを出してくれると言ってきた。

ところが今度、突然、自分が間違っていたことに気づいた。42年もの時間が過ぎたが、時間は答案を与えてくれなかった。われわれの文学は改めて古い問題に帰って来た。なぜ私に無数の悪罵が投げかけられるのか、それはまさに私がこの災難の中で、称賛を書かず、喜劇を書かず、明るい面を描かないからこそ、ではないか？この輪廻のごとき巡り合わせは、思えばまことに不可思議である。ここまで書いた時、友人が『察網』に載った文章を転送してきた。タイトルは「悪意満々の『封城日記』」、筆者は齊建華。（注6）

そこで私はまず一言、警告したい。齊先生、貴方が私を罵ることに問題ありません。しかし、デマをねつ造し、人を陥れようとしている疑いがあります。貴方が自分の文章を削除し、公開で謝罪するよう提案します。もし削除も謝罪もしなければ、私は法的手段で解決します。『察網』も含めて、貴方が毎日、私を罵倒することには問題はありませんが、齊建華のごとく大っぴらにデマを飛ばし、人を誹謗する文章を発表するのであれば、貴方にどのような背景であろうと、どれほどのお役人が貴方の腰を支えていようと、貴方の後ろ盾がいかに強大であろうと、勿論、貴方ともども告発します。中国は法治社会です。私が貴方たちの私に対する悪罵を許すのは私の寛容です。それはつまるところ、貴方がたの品格の問題です。しかし、デマをでっちあげて陥れようとするのは違法の疑いがあります。ここで、『察網』と齊建華先生に申し上げます。ご自分のしたことをしっかり認めてください。それが出来ないのなら、法廷でお会いしましょう！貴方が見えなくとも、武漢はまもなく開城です。私は退職者といえども裁判を争う力はまだあります。（続）

\*\*\*\*\*

注1：作者が手紙とかコメントとかいう場合はおおむね作者に対する批判、攻撃であり、「高校生」とか「親戚」とかいうのは、その際に投書者が使う筆名である。

注2：昨年末、新型の感染症が流行していることを医師仲間のチャットで警告し、「デマを流した」かどで警察から「訓戒処分」を受け、その後、自分も感染して2月7日に死去した中心病院の李文亮医師について、世論の動向から政府は評価を一転して、「烈士」として称揚することにした。そのことを指す。

注3：二湘とは珍しい名前だが、女性作家（のおそらくペンネーム）である。「湘」は湖南省の別名だが、この人は湖南の出身。北京大学卒業後、米テキサス大学オースティン分校でコンピュータ修士号。その後、カリフォルニアで作家活動。代表作は『狂流』、『重返2046』、『白的粉』など。

注4：「老三篇」とは毛沢東思想学習の基本文献とされた『ベチューンを記念する』、『人民に服務する』、『愚公、山を移す』の三篇の論文を指す。

注5：「1978年から1979年」というのは、毛沢東が1976年に死去した後、鄧小平による改革開放路線が緒に就く時期であり、北京市内に大量の壁新聞が張り出され、また新聞・雑誌でもかなり自由な言論活動、創作活動が展開された。

注6：齊建華というのは一見して「一齊（そろって）に中華を建設する」という意味を込めたペンネームであることが分かる。その前の「高校生」とかその「親戚」とかいうのと同じである。したがって、こういうわざとらしいペンネームには受け手もそのつもりで読むことが方方の書き方に現れている。『察網』と言う名前が登場するが、「察」という字から警察関係？と気を回さないように。警察は中国語では「公安」、検察は日本と同じで「察」を使うが、この場合は「網」（ネット）を観「察」すると見たほうが良いと思われる。